

第 5 学年〇組 道徳学習指導案

授業者 〇〇〇〇〇小学校 〇〇 〇〇
 平成 24 年〇月〇日 (〇) 第〇校時
 在籍児童数 32 名 場所 5 年〇組教室

1 主題名 夢をもち、未来を拓く 1-(5)創意・進取

資料名 枇木(ひぎ)作りの里

—附木(つけぎ)から枇木を考案した宮島勘左衛門—
 (出典 埼玉県教育委員会「道徳実践活動郷土資料集」平成 14 年 3 月)

2 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について

「1-(5)創意・進取」は、「真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。」とあり、小学校高学年で初めて登場する。そして、中学校の「真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。」(1-(4)真理愛、理想の実現)へと発展していく。

進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくするのは何のためか。それは言うまでもなく、自分の生活をよりよくするためである。いかなる時代においても、人は自己の人生を切り拓いていく積極性と力強さを持つことが大切である。そして、絶えず高い理想を求め、志をもって明るく生き生きと生きることが、人生に意欲をわかせる、自分の生涯を豊かにすることにつながる。

本項目が、「夢をもち未来を拓く子」(学校教育目標)の育成につながることを目指し、本時の授業を展開したい。

(2) 児童の実態について

本学級の児童は、全体的に受け身の姿勢の子が多い。この傾向は年々顕著になっており、その原因として「生活の豊かさ」「少子化」の影響が考えられる。

そこで、日頃の学級経営では、青少年赤十字の態度目標「気づき・考え・実行する」を積極的に取り入れている。「先見(各自が見通しをもった生活)」「必要最小限度の教師の指示」「自問清掃」などを通して、児童一人一人が自分で考えて行動できるように配慮している。

その結果、最近では、自分の考えで動く児童が増えてきた。また、人のよいことを素直に認め合える集団へと変わってきた。まだまだ失敗を恐れる傾向はあるが、現在は、学校祭りのクラスの出し物の準備を通して、アイデアを出し合いながらモノを作る楽しさを味わい始めている。

本項目で求められる、「困難に向かって、知恵を出し合い乗り越える、たくましい子ども」を、本時はもちろんのこと、これからの学校生活の中でも育てていきたい。

(3) 資料について

本資料の主人公「宮島勘左衛門」は郷土の偉人である。江戸時代末に生まれた人で、「枇木(経木)」を発明した人である。

嘉永年間に関東一円で竹が枯れてしまい、食品包装用の竹皮が手に入らない時期が続いた。農業で家族を養っていた勘左衛門は、かつての宮大工の経験を生かし、持ち前の研究心と粘り強さで「枇木(経木)」を発明する。その年月は、最初の発案から完成まで 5 年を要した。彼の行動を一言で表すならば、「あきらめない。」の言葉がちょうどあてはまる。

本時では、以下の3場面を中心に扱う。

- ①竹皮がなくなり、村人の困り果てた様子を見て立ち上がる勘左衛門。
- ②5年もの長い間、杣木の完成を夢見て研究し続ける、勘左衛門とその家族。
- ③完成した杣木を妻と押し戴く勘左衛門の胸の内。

郷土の偉人を扱うことで、児童が親しみをもって資料と向き合えるよう、また、郷土に誇りを持つるようにと配慮し、本時を展開したい。

3 研究の視点

(1) 導入、資料渡しの工夫

本資料は歴史的内容であるため、児童はもちろんのこと、教師でも分かりにくい。そこで、関係者の協力を得て、事前に詳しい調査を行った。その結果、本時の導入で杣木の実物を見せるほか、紙芝居形式で写真を多く使った資料渡しを試みる。

(2) 主人公の心情を追った板書の工夫

本資料は、主人公が自分自身と葛藤する内容である。そのため、明確な「相手方」が存在しない、特異な資料と言える。そこで、主人公の気持ちの変化が時系列的にわかるよう、横書きの板書を試みる。

(3) 偉人を扱う際の「自分を見つめる時間」の工夫

偉人を扱う資料の一番の問題は、主人公と子どもの距離が遠いことである。児童にとって、話し合いの最後まで「他人事の話」に終始してしまう危険性がある。そこで、自分を見つめる時間では、「主人公の『熱意』を『同じ人間』としてどう思うか？」と子どもに投げかけ、少しでも主人公と自分を重ねられるように配慮した。

(4) 児童の心に残る「説話」の工夫

本時の授業を印象深くするために、授業最後の説話をゲストティーチャーにお願いした。具体的には、町内で最後の杣木職人の方に、ビデオレターの形で出演していただく。

(5) 「ユニバーサルデザインの視点」を取り入れた授業の提案

(詳細は、次項を参照。)

4 ユニバーサルデザインの視点

本校は特別支援学級設置校であると共に、本学級では支援籍児童も一緒に学習している。そこで、通常学級でも手軽に実践できそうな、「ユニバーサルデザインの視点」を意識した道徳授業を提案する。

| 項 目 | 具 体 的 な 内 容 |
|-----------------------|---|
| (1) 教室環境① 「場の構造化」 | ・話し合い活動がしやすいように、座席を「コの字型」に 配置する。 |
| (2) 教室環境② 「刺激への配慮」 | ・黒板に集中できるよう、教室前面の掲示物を必要最小限にする。 ・テレビ下の教師用本棚を目隠しし、児童が気にならないようにする。 |
| (3) ルールの確立 | ・日頃の授業で「分かち合い」の形式を取り入れた、話し合いの仕方を身につけるようにする。 ＜「分かち合い」とは＞ 話し合いの方法の一つで、「傾聴」する姿勢を大切にされた方法。 ①発表者以外は黙って、うなずいて聞く。（口をはさまない） ②どうしても発表したくないときは、パスしてもよい。 |
| (4) 生活の見通し | ・一日の授業の流れを前黒板に示しておき、一日の流れをイメージできるようにしておく（本学級では「先見」と呼んでいる）。 |
| (5) 授業の見通し | ・道徳の授業の流れを簡単に図式化し、教室前方に掲示しておく。 |
| (6) 授業の組み立て | ・資料文を朗読するとき、パワーポイント等を使って、文章と場面絵を映像化して示す。 |
| (7) 板書の工夫 | ・話し合いをする場面絵を最初に全て提示し、話し合いの見通しを持つようにする。 ・児童の発表を板書するとき、教師が要約した内容を、色を使って見やすく板書する。 |
| (8) 集中・注目のさせ方 | ・朗読の際、パワーポイントを活用する。 ・机の上には、筆箱以外の不必要な物は置かせない。 ・作業が早く終わっても、おしゃべりしないよう促す。 |
| (9) 指示の出し方 | ・教師の発問は短く、的確に出すよう心がける。 |
| (10) 参加の促進 | ・ワークシートを活用し、自分の考えを自由に書くようにする。 |
| (11) 個人差への配慮 | ・ワークシートが書けない児童には、教師が側に行ってヒントを与える。 |
| (12) 学級モラルの形成 | ・教師は、互いの「違い」を「よさ」と感じ合える学級の 雰囲気作りを日頃から心がける。 |

5 本時について（1時間扱い）

(1) ねらい 夢を持ち、未来を拓こうとする心情を養う。

(2) 展 開

| 段階 | 学 習 活 動 ○主な発問 | 予想される児童の反応 | *指導上の留意点 ☆評価、◆エバーサルデザインの視点 | 時 間 |
|--------|---|--|---|---------|
| 導 入 | <p>1 包装用品の実物を見て、その歴史について知る。</p> <p>2 本物の杣木を見て、その発明者が郷土の偉人であることを知る。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・今とは全然違うな。 ・昔は自然のものを使っていたんだ。 ・地元になんかすごい人がいたんだ。 ・杣木を作るのは難しそうだ。 | <ul style="list-style-type: none"> ◆本時の授業の流れを掲示しておく。 *本時の資料内容を理解しやすくするため、実物を提示して説明する。 *本時の主人公が郷土の偉人であることを児童に伝え、資料への関心を持つようにする。 ◆実物を示し、触ることで注目を促す。 | 3 分 |
| 展 開 | <p>3 資料について知る。</p> | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><主人公> 宮島勘左衛門（前校長先生のご先祖）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勘左衛門は、幼いころから工夫して物を作ることが好き。 ・勘左衛門が附木作りをしていた嘉永の初め頃、関東一帯の竹林が原因不明で枯れてしまった。 ・かつて宮大工の経験を持つ勘左衛門は、附木から杣木を思いつく。 </div> | <ul style="list-style-type: none"> ◆範読は紙芝居形式で行い、文章を映像化して提示する。 *場面絵以外にも内容理解のための写真等を多く提示する。 *範読の中で、難語句の説明も随時挟み込む。 | 10 分 |
| | <p>4 主人公の気持ちの変化について話し合う。</p> <p>①竹の皮が手に入らなくなって頭を抱えている店の様子を聞いた勘左衛門は、どんなことをかんがえたでしょう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・この状態を何とかしたい。 ・店の人たちを助けてやりたいな。 ・このままだと買い物の時、村中のみんなが困ってしまうだろうな。 ・附木を工夫すれば、代わりの物が作れそうさ。 ・新しい物を生み出すチャンスだ。 | <ul style="list-style-type: none"> ◆すべての場面絵をあらかじめ提示しておき、話し合いの見通しを持つように促す。 ◆児童の意見を要約して板書し、場面絵と対比することで今何をしているのか意識するように促す。 *児童には、村人の困難な状況が理解できるよう、教師が補足説明を付け加える。 *困難な状況の中から希望を見出そうとする主人公の姿を押さえた上で、次の発問につなげる。 | 25 分 |

| | | | | |
|----|---|---|---|----|
| | <p>② 枇木が完成するまでの5年間、勘左衛門はどんな思いで研究していたでしょう。</p> <p>③ 完成した枇木を妻とおしただく勘左衛門は、どんな顔だったでしょう。</p> <p>補 その時、勘左衛門はどんなことを言ったでしょう。</p> <p>5 自己を見つめる。</p> <p>○ 勘左衛門の『熱意』を『同じ人間』としてどう思いますか？</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 完成まではほど遠いなあ。でも、あきらめないぞ。 ・ あきらめようか。でも、がんばらないと。 ・ 道具が完成したぞ。あと少しだ。 ・ みんなを喜ばせよう。 ・ これが完成すれば、竹の皮がなくても大丈夫。生活がもっとよくなるぞ。 ・ 母さんや子どもたちには申し訳ないな。 <p>泣いている顔</p> <p>喜んでいる顔</p> <p>ほっとしている顔</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「母さん、子どもたち、ありがとう。今まで、よくがまんしてくれたね。」 ・ 「今まで、努力してきたよかった。あきらめないでよかった。」 ・ 「早く、村のみんなの喜ぶ顔が見たいな。」 ・ 「これで暮らしが便利になるぞ。」 <ul style="list-style-type: none"> ・ すばらしい！ ・ あきらめないことが大切だと思った。 ・ 大変なことも、努力すれば乗り越えられる。 ・ どんな状況でも夢や希望を持ち続けたい。 | <ul style="list-style-type: none"> * 本文には書かれていないが、「5年間」という言葉を明示することで、主人公の粘り強さに気づかせたい。 * 葛藤しながらも前向きに研究に取り組む勘左衛門の心の内を、様々な視点から児童に考えるようにする。 * 場面の時間的広がりから児童の思考の散漫が予想される。そこで、キーワード（短冊）を明示し、児童の思考の手助けをする。 <p>* 「<input type="text"/>顔」という短冊を提示し、<input type="text"/>に当てはまる言葉を考えることで主人公の気持ちに迫りたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 補足発問（切り返し）では、会話形式で発表し、主人公の気持ちを表現することをねらう。 * 主人公の行動が自分のためだけでなく、人のため、世のために役立っていることを押さえる。 ◆ 実際に枇木を児童の手に持たせながら発表させることで、話し合いへの参加を促す。 <ul style="list-style-type: none"> * 児童が偉人を自分とは別格として考えないように、「同じ人間」として考えるようにする。 ◆ 思考する時間、書く時間等を明確に示し、児童が書く活動に集中できるようにする。 ◆ ワークシートが書けない児童には、教師が側に行ってヒントを与える。 ☆ 主人公の生き方から「創意・進取」について考えを深められたか。（ワークシート） | 5分 |
| 終末 | 6 ゲストティーチャーのお話を聞く。（VTR） | | * 枇木作りの元職人の方に、逸話やねらいに沿った話をしていただく。 | 2分 |

6 事後指導

学校行事の準備において、「創意・進取」のねらいに沿った活動ができた児童を賞賛し、意識化を図る。

7 評価

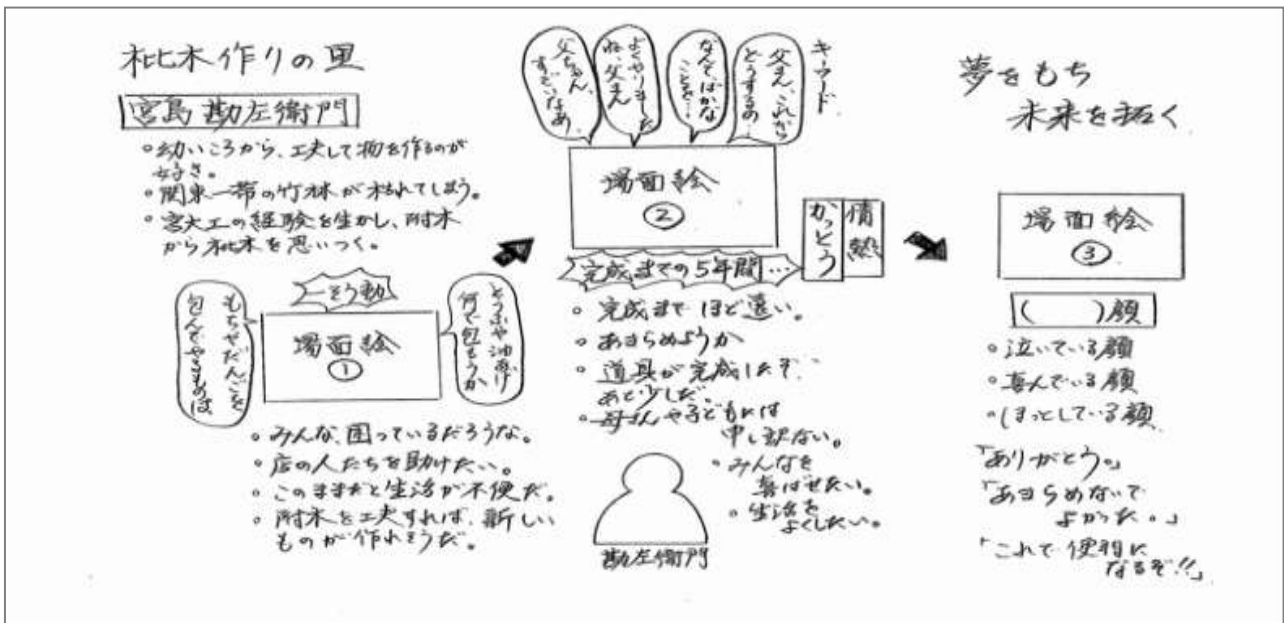
<児童側の評価>・主人公の立場に立って、気持ちを考えることができたか。

・友達の考えを聞いて、自分の考えを深めることができたか。

<教師側の評価>・一連の授業を通して、本時のねらいに迫ることができたか。

・どの児童も授業に参加しやすいよう、ユニバーサルデザインを意識した授業が展開できたか。

8 板書計画



補足資料

●資料を理解するために

「子育てに必要なのは『貧乏』と『母親の愛』である。」——これは、郷土で生まれ育った町長が、訓辞で述べられた言葉である。そして、「何もない〇〇では、人そのものが宝であり、子どもの教育に未来がかかっている。」と続く。今回の郷土資料を読み解く上で重要な鍵となるので、始めに載せておきたい。

本資料の主人公「宮島勘左衛門」は郷土の偉人である。江戸時代後半に生きた人で、「批木（ひぎ）」を発明した人である。

地元の古老は「ひげ」と呼ぶ。批木とは、木でできた食品を包む包装用品である。一般には「経木（きょうぎ）」と呼ばれ、今でも、魚屋で刺身を包むときや納豆などに使われている。木を薄く削った包装紙のような物で、高級食材を買うときでしか見られなくなった。

勘左衛門が批木を発明したきっかけは、江戸時代の嘉永年間に、関東一帯で竹林が一斉に枯れたことから始まる。当時は、2メートル近く伸びた竹の皮をはぎ取り、それで和菓子やがんもどきなどの食品を包んでいた（「竹皮」と呼ぶ）。それが手に入らなくなり、村人は皆困り果てたのである。そして、このころ農業の傍ら附木（つけぎ）を作っていた勘左衛門は、昔、江戸で宮大工をしていた経験を生かし、批木を思いついた。それは、長さ1メートル以上にもなる巨大な鉋（かんな）を作り、その上に赤松の丸太を滑らせるというものであった。

試行錯誤の上、5年かけてようやく完成させた批木。貧しい農村の生活の中で、この偉業を成し遂げた勘左衛門を支えたものは何か。それは、子どもの頃から工夫して作ることが好きであったと言われている勘左衛門の持ち前の性格によるところが大きい。そして、自分の生活を、さらには人々の生活をよりよくしたと願う勘左衛門のたくましさも影響している。また、決して忘れてはならないのが、「内助の功」とも言える妻の支えである。近所の者に陰口を言われながらも発明に没頭する勘左衛門の姿は、今の子どもたちにも共感を与えるに違いない。

一般に、偉人伝は「古臭い」「美辞麗句の話」などと言われ、避けられがちではないか。しかし最近では、スポーツ選手など今、活躍している有名人の本が、子どもたちに人気があるとされている。昔話などが語られなくなった現在、実は子どもたちは理想の大人像を請い求めているとのデータもある。

私自身、道徳の勉強をしてきたものの、「偉人伝では主人公の心情を深く追求できないのでは・・・」との苦手意識があった。しかし、数年前に偶然この資料を発見した瞬間、いつかこの資料で授業がしたいと思いつけてきた。そして、今回、たくさんの町の人にインタビューしていくうちに、消えゆく歴史の中で人々が懸命に生き抜いた時代があったこと、そして、その上に今日の私たちの生活が成り立っていることに気づいたとき、この連綿と続く人々の営みを後世の子どもたちに伝えねばならないとの義務感が、私の心の中に芽生えてきた。

決して、この話は道徳資料として分かりやすいとは言えない。しかし、文章の一字一句に漂う郷土の香りや作者の熱い思いを子どもたちが少しでも感じ取ってくれば、そして、郷土に誇りを持ってくれればとの願いを込めて、今回の研究授業を提案する。

13 枇木作りの里

— 附木から枇木を考案した宮島勘左衛門 —

「キューコン、キューコン、キューコン」

古びたわら屋根が白く見えるほど霜の深い朝、寒さをつき破るようなかん高い枇木つきの音……。静かな里のにぎやかな夜明けだ。

今から百五十年前、宮島勘左衛門は、月輪の里で農業のかたわら妻を相手に、附木作りをして細々と暮らしをたてていた。勘左衛門が附木作りをしていた嘉永の初めの頃、関東一帯の竹林が原因不明でいたるところ枯れてしまった。

「これから、がんもどきや油あげは何で包もうか。」

「もちやだんごをお客さんに包んでやるものは……。」

と、町や村の豆ふ屋や菓子屋では、頭をかかえてしまった。この頃は、ぬれた物を包むのに、竹の皮を使用していたのだ。その猛暴の竹林が、かれ果ててしまったのだから、一そう動である。附木商人の勘左衛門は、商人たちの話を聞き、

「竹の皮にかわるものが何とか作れないものかなあ。この附木の赤松からは作れないものか。」

などと、附木作りの合い間をみては、材料の赤松を手にとってつぶやいていた。若いころ、宮大工の経験がある勘左衛門は、(材料は赤松でいいしよう。ぶだ。大きく深く削れば、何とか竹のかわりになるのではないか。)と考え、そばにいろぬきに、枇木作りのことを話すのだっ

た。

さっそく準備に取りかかった。道具を作らなければならない。うかんなどである。かんなの台作りから始めた。台木として堅そうな木をいろいろ試してみた。うまくゆかない。最後には、最も堅いと言われる檜の木を選んだ。次は、かんなの大きさだが、なかなか見当もつかなかった。勘左衛門は、かんな作りに明けくれるようになってしまった。妻と二人でする附木作りには、全然手を出さなくなってしまった。収入のない日が何日も続き、育ち盛りの子どもをかえ暮らして困った妻は、

「父さん、これからどうするのですか。附木作りをしなくて……」

と、途方にくれて、勘左衛門にとりすがった。また、

「雨が降りそうだ。父さん、今日中に妻刈りをしてしまわないと、かっただ変をとりにこんでくださいよ。」

と、いう妻の言葉にも、勘左衛門は、いっこうに耳をかそうとしなかった。わずかばかりの農作業にも、全然手をかさなくなってしまった。ようやく、かんなの見当がつくと、刃の大きさや角度を設計し、かじやに注文した。刃が届くと、トントントンと穂で刃の出し具合はどうか、刃の角度はどうかなど、手でなでたり、目に近づけ片目でじつとその具合をなぐる日が、夜も昼も何日も続いていった。附木作りをしている近所の人々は、こんな勘左衛門をみては、

「なんてばかなことを、附木を作っていればいいのに。」

「あれじゃあ、子どもがかわいそうに、おかみさんの苦勞も考えない

で、何てことを……」

と、かげで言い合っていた。しかし、勘左衛門の耳には、こんな言葉は入らなかつた。三度の食事もそこそこに、仕事場へ入り、かんなをトントン、トントン、と打っては、台木に顔を近づけ、木の一方を上げた。横から上からじつとみつめていた。そして、木の上をすべらせる。うまく割れない。(うーん。刃の角度が)床に腰を下ろし、手を細み首をかしげていた。しばらくすると、勘左衛門は、すつくと立ち上がった。台木にはめた刃を取り出すのである。また最初から刃を打ち直すのだ。妻も家事の仕事を進ませると夫のそばであれこれとかんな作りを手伝うようになった。

ついに、巨大なかんなができ上がった。たて百二十センチメートル、横三十七センチメートル、厚さ十五センチメートルのものである。

「よくやりましたね。父さん。」

「父ちゃん、すごいなあ。こんなにてっかいん。」

と、妻と子どもたちもかんなを見て、びっくりした。勘左衛門は、腕を組みだまっとうなずいていた。これから最後の難門である。このかんなの上にとのようにして赤松の丸太をすべらせるのである。その日から勘左衛門夫妻は、仕事場で

「おい、かんなをもうちよつと高く、おお、高すぎる。」

「はいはい、このくらいかい。」

「ううむ、丸太がうこいてしまうな、止めないとだめかな。」

来る日も来る日も、赤松の丸太をどのようにするか、その解決に取り組んでいた。

「キューコン。」

ついに、喜びの日が来た。かんなの上に直径十五センチメートル、長さ六十七センチメートルの赤松の丸太をのせ、長い棒にくくり付けた。この棒を勘左衛門は妻としっかりとにぎり二人の力ですべらせた。

「父さん、落ちたよ。ほら、あんなに大きいのが。」

妻のかん高い声、半紙ぐらいの厚さの長方形のかんなくすが落ちていた。勘左衛門は、だまって拾いあげた。ていねいに手でさすったり、においをかいだりして、一つ大きく肩で息をした。

「父さん、よかったね。いいにおい。この柔らかさなら包めますよ。だいじょうぶですよ。」

「父ちゃん、やったあ。すごいぞ。」

何ともいえない赤松のにおい。美しい木目、柔らかい手ざわり……靴木である。勘左衛門は、ひげの頬をくしゃくしゃにしなながら、その一枚を妻とおしただき、いつまでも喜び合っていた。

靴木は、町や村の人々に貴重がられていった。その後しばらくして、月輪の里のあちこちから、キューコン、キューコンと靴木つきの音が、響いてきた。

